

第二十八章 崑崙山の戦闘 (二八)

このとき大八洲彦命は元彦に命じて少数の神軍を引率れ、橄欖山を守らしめた。この山はエルサレムの西方にある高山で、エルサレムおよび竜宮城を守るには、もつとも必要の地点である。

この時エデンの野に集まりし竹熊は木常姫、足長彦、富屋彦を部将として、第一着に橄欖山の背後に出で、背面より襲撃をしてきた。また一方大森別は中空より高津鳥の魔軍を指揮して、隕石の珠を黄金橋の上に無数に発射した。されども黄金橋は、どうしても落すことはできなかつた。

ここにおいて大八洲彦命は改心したる牛人を引率し、天の高天原に裁断を仰ぐべく、雲井はるかに舞い上り、月の大神の裁断を乞い、かつ応援軍を派遣されむことを歎願した。しかしながら天上においても地の高天原と同様に、正邪両軍の戦闘真最中であつて、月の大神は月宮殿の奥深く隠れたまい、拝顔することは得なかつた。

大八洲彦命はやむを得ず地上に降臨せむとするに先立ち、牛人をして高天原の実情を金勝要神に報告せしめられた。しかし牛人は途中において竹熊、木常姫の一派の俘虜となり、大八洲彦命の報告をせなかつた。しかして再び、竹熊の魔軍に従つてしまつたので

※崑崙山……ここでは奈良県と三重県との境に連なる台高山脈の主峰たる大台ヶ原山のこと。

ある。

大八洲彦命は独り少数の神軍とともに、天山の頂に降ってきた。ここには胸長彦の軍勢が待伏せ、表面では歓迎と見せかけ、山麓に伏兵をおきて一斉に火弾を浴せかけた。そのとき天上に声あり、

『崑崙山に移れ』

との神命である。

然るに山麓には伏兵が無数に取巻いている。このとき天より天の羽衣が幾つともなく降ってきた。大八洲彦命はじめ従神は、一々これを身に纏い、中空を翔つて、ようやく崑崙山に難を避けた。

険峻な山に似ず、山巔には非常な平原が広く展開されており、いろいろの草花が爛漫と咲き乱れ、珍らしい果物が沢山に実っていた。大八洲彦命の一隊は、非常に空腹を感じたために、その果物を取っておのおの食料に代えた。胸長彦の軍勢は、またもや山麓に押寄せ、八方より喊声を揚げた。見ると、数百万の魔軍が蟻の這い出る隙もなきまでヒシヒシと取り巻いている。しかしてその軍勢は十二の山道を伝うて十二方より、一度に攻め上つて来た。めいめいに手分して、大八洲彦命の軍勢は各自部署を定め上りくる軍勢を、そこに実っている桃の実を取って打ちつけた。たちまち敵軍はいずれも、雪崩の如くになつて潰え、山麓に落ち込んだ。

この時、中空から何ともいえぬ妖雲が現れるよと見るまに、大自在天大國彦の部下の将卒が、四方八方より崑崙山を目がけて破竹の勢で攻めかけてくる。大八洲彦命は桃の枝を折り、それを左右に打ち振りたまえば、部下の神将もおなじく桃の枝をとって、大自在天の魔軍に向つて打ち振つた。見る間に一天カハリと晴れわたり、拭うがごとく紫の美わしき祥雲に変わつてきた。而して非常に大なる太陽は山腹を豊栄登りに立ち登り、天地の暗を照して皎々と山の中央に輝きはじめた。しかして黒雲の中から大自在天の軍勢の姿は消え失せた。しかし山の八合目あたりに何となくどよめきの声が聞えてきた。敵軍が再挙の相談の声である。胸長彦の魔軍勢は、山麓の谷に落ちて或いは傷つき、あるいは死し非常な混雑を極めてゐる。その声と相合して何ともいえぬ嫌な感じである。よつて大八洲彦命は、天に向つて天津祝詞を奏上された。つづいて従属の神人も同じく祝詞を合唱した。その声は天地に響きわたつて、そこから一面夜が明けたような、壮快な感じがする。そのとき既に太陽は形を小さくして、中天に上つてゐた。今までの敵軍の矢叫びの声も、大自在天軍の囁きも松吹く風と變つてしまつた。

(大正一〇・一〇・三二 旧九・三二 外山豊二録)

瑞 月

魔軍の矢叫びのこゑ鯨波の聲

松ふく風となりけるかな